

＜日本イギリス哲学会 第64回関西部会例会 報告要旨＞

報告 1：ジョン・デイヴィス（1569-1626）のアイルランド論再考

竹澤 祐丈

16世紀後半から17世紀初頭にかけてイングランドならびにアイルランドで法律家・議員として活躍したジョン・デイヴィスは、イングランドのコモン・ローをアイルランドを「植民地化するための道具」（Pawlich(1985)）として用いた思想家、「古来の国制 the ancient constitution」を展開したコモン・ロー学者（Pocock(1957)）、また国内では、矢内原忠雄の植民学の重要な典拠（齋藤(2009)）、あるいはルネサンス人文主義者（木村(2020)、木村(2021)）として注目を集めつつある。

本報告の目的は、デイヴィス解釈において言及されてきた彼の『アイルランドが完全に征服されなかった真の諸原因の発見』（1612年）を再読することで、そのアイルランド観をより明瞭に把握することを目指す。この著作においてデイヴィスが、アイルランド内の地域差や宗教の問題をどのように論じているのか、そして（法全般ではなく）法の一部の問題に絞って議論をしたことの意味の解明などについて、同時代の複合国家のマネジメントの観点から分析する予定である。

（京都大学）

報告 2：ヒュームの人種差別主義の哲学的基礎

澤田 和範

2020年、アメリカで再燃した Black Lives Matter 運動が SNS などを通じて世界的な規模に拡大していくなか、エディンバラ大学は学内の「デイヴィッド・ヒューム・タワー」を暫定的に改称すると発表した。問題とされたのは、ヒュームのエッセイ「国民性について」の註釈に現れる人種差別主義的な発言である。実際のところ、ヒュームが人種差別主義者だったということについては、否定的意見はほぼ存在しない。何か議論があり得るとすれば、我々がこの事実についてどう考えるべきかという問題だろう。

本報告は、この問いに答えるための小さな一歩として、ヒュームが人種差別主義者であったという事実の詳細を確認しようというものである。とはいえ、私はヒューム哲学の研究者であるに過ぎない。そのために、本報告には始めから一定の限界がある。それゆえ、本報告はヒュームの処遇について何らかの結論を導くことを目指すのではなく、むしろ、ヒュームの人種差別主義と彼の哲学との関係はいかなるものかという問題へ向かうことになるだろう。

（日本学術振興会特別研究員 PD・関西学院大学）

報告 3：情念の穏和化の政治学—ヒューム政治思想における宗教論と趣味論—

鎌田 厚志

本報告の目的は、哲学や宗教論や趣味論など多岐に渡るヒュームの思想を「情念の穏和化」という企画を持った政治思想として読み解くことである。ヒュームは「情念論」および「宗教の自然史」において、「希望と恐怖」の情念が過度に激しくなることを警戒し、これらの情念を穏和化することを主張していた。この問題意識は、「情念の繊細さ」を「趣味の繊細さ」によって克服することを論じる趣味論にも通底している。実際、「情念論」「宗教の自然史」「趣味の標準について」は1757年出版の『四論考集』に収録され同時に執筆されていた。また、それ以外の著作を通して、ヒュームは、政治社会の構成員の情念の穏和化を安定した統治の前提として重視していた。ヒュームの思想全般における世俗化の推進は穏和化という目的のために要請されたことだった。ヒュームにおける情念の穏和化の企画という観点から、本稿では宗教論と趣味論を政治思想の中に位置づけることを目指す。

(九州大学大学院協力研究員・福岡大学非常勤講師)